

行動と潜在意識

Behavior and the Unconscious

ὅς τὰ κλείν' ἀινίγματ' ἦδει καὶ κράτιστος ἦν ἀνὴρ

「名高き謎を言い当てし者にして、いとも強き者」

ソフォクレス 「エディプス王」から

小林 幹 夫

Mikio Kobayashi

As behavioral science is so involved in many branches of social sciences, we should, at first, decide from what viewpoints we may proceed. If we take up n-dimension value, a behavior is expressed on an n-dimension axiology and its vector is expressed as $(x_1 \ x_2 \ \dots \ x_n)$ matrix. Herein we research the behavioral theory, underlying the interaction between an individual creative act and the social unconsciousness of the masses of the situation which evaluates the efficiency or the success of the individual creative act. Sometimes we appreciate another man's creative thought as if we had been seeking it in our dark unconscious wishes for a very long time. The central problem of our research is fixed on this relationship between the creative act and the masses' response to or judgement of the act.

1. (序 論)

始めに、私が何故「行動論」に関わるようになったかを、研究回顧的に序述するところから出発してみることにする。

私の研究者としての出発点は、東京文理大の研究科での論理学と数論理の文献の渉漁に始まった。ついで京都大学の大学院（旧制）での研究課題は「歴史における必然性と偶然性」であった。偶然性の方は、論理学の研究とともに理学部数学科の「確率論」の講義に出席したりもした。

必然性の方は、視点の定め方によって、実にいろいろの見方ができる。アダム・スミス、マルクス、ケインズの理論も一つの歴史の必然性の理論と言えるし、カントやヘーゲルの歴史観や歴史哲学にも必然性が示されている。生物学にはJ・モノーの「偶然と必然」と云う有名な本があるし、ダーウィン、スペンサー、ベルグソンにも生物の進化論の必然性が論じられているのは、周知のことである。中国の「史記」や我が国の慈円の「愚管抄」にも、違った形のあべき歴史の「理」が説かれている。宇宙の生成史も歴史と見ると、時間空間的には限りがないものになる。一方で、史観や歴史哲学の視座のおき場所も問題となるし、歴史における真実

と権力と表現の問題もある。そして偶然論は、ある一定の必然性との相関関係で、始めて偶然と言えるから、必然と偶然はいつも相互に他を規定しあっているものである。

さて研究課題の完成のためには、私は私なりに何とか、自分の必然性の歴史理論を提出せねばならぬ。こうして私は、「歴史場」の理論を五つの試論としてまとめてみた。ここではそのうちの一つだけを略述するにとどめる。

当然のことだが、いつの時代にも権力者側は自己を正当づける表現媒体をもち、弱者の側は、仮に正義であっても、その表現は抹殺されてしまう。多くの場合、抹殺された表現はそのまま歴史の舞台から消えるのだが、それが極度の民衆への強い印象を残した場合、弱い側の民衆の魂の情報野を通して、それは一つの心の真実の永遠性を担い、時に権力装置^{アパルトヘイト}を改変したり、崩壊させたりするか、学問とか制度として、後世へ長い行動効率をおよぼす。こうして、特殊な個（例としてソクラテスとイエス）、権力、権力をとりまき、権力を支えるテクノクラート集団（イエスの場合は司祭、パリサイ人、サドカイ人、ローマの殖民地支配機構、ソクラテスの場合は技術者、詩人、政治家、ソフィストたち）、そして情報媒体としての民衆を、歴史における行動効率の素材と見なした。「歴史場」を設定し、新たな真理の体現者ソクラテスとイエスの行動が、何故、プラントンやクセノフォンの著作、マタイ伝やヨハネ伝となって、後世への強い行動効果を与えるようになったかを試論として発表してみた。（拙著「信仰・権力・ニヒリズム」1961年 関書院新社刊、参照）

偶然論の方は、確率論の数学史を跡づけてみることによって、そうした数学理論からはみ出してしまう偶然のおそろしさ、不可思議さをとりあつかってみた。すなわち、パスカルとフェルマー、カントとラプラスとガウス、現代ではフォン、ミゼスとケインズとコルモゴロフとクープマンなどによる確率論の学としての形成をふりかえりながら、例えば偶然乗りあわせてしまった故に死を招いたり、ふとふれあい、めぐり会う運命の不思議さをも同時に、数理哲学とともに論じてみた。（「偶然への問い」昭和33年 哲学研究 第458号、参照）

次に、Computerの出現が我が国朝野でさかんにジャーナリズムなどでとりあげられ始めた頃、Computerによってチェスをするロボットも現われたりしたことを知って、人間の頭脳の思考を、機械も行ないうると言う事実に着目して、action-reactionの「記号の場」を考え、そこで昔から論じられてきた有名な論理的矛盾、例えば「クレタ島のうそつき」なぞのContradictionを、別な観点から見なおしてみることによって、何故、矛盾が矛盾として生じてしまうかを解明しようとした。即ち、数学的行動の性格を幾つかあげ、記号の場の特徴的性格づけを幾つかあげ、こうして記号的世界の構造とメカニズムによって、ラッセルのように矛盾を回避するのではなく、むしろ、記号的世界の行為のaction-reactionが正しく機能しないところに、当然の結果として矛盾が生じてくることを、明らかにした。（日本哲学会、科学基礎論学会、昭和33年口頭発表「行為の立場から見た数論理の構造」昭和42年大手前女子大学論集、第二号、参照）

また、行動確率と一定の状況を設定することにより、状況に投げ入れられた人が、その人の性格にそった価値基準に従って行動する点に着目して、「実存分析と行動確率による性格型決定方法の一考察」を発表した。（昭和37年 同志社大学心理学科大学院発表。昭和39年「実存分析と行動確率による性格型決定方法の一考察」沼津工業高等専門学校 研究報告 第一号、参照）

その他、確率過程を行動と結びつけて、何とか新しい理論のもとになりうるものを見出しえ

ないかと模索していた時期があったが、これはとうとう成功しなかった。あとになって考えてみると、音符の連続も一つの偶然性の連続と考えるから、例えばシューベルト式音の連続のパターン、モーツァルト式音の連続のパターン、これも確率過程と見なしうる。現代の電子音楽やシンセサイザーなどでは、幾つかの二次曲線を組み合わせて別の音の連続を構成したりしているわけだから、現代の新しい型の作曲家は、もう、頻繁に日常的に、音のプロセスの模索をやっていて、そのうちの美しいものだけを聴衆の前に響かせているのかもしれない。

私は学問とは別に、心の拠り所として禅の実践とか公案もやっていたので、それを生かして雲水養成の禅のための短大で、次の10数年間、禅の哲学とか、禅仏教と西欧、東洋の宗教との比較宗教の研究をしたり、教えたりして、10数年の間、行動論とか偶然論は中断していた。

2.

さて、行動理論と言っても実に広い。心理学、人類学、人間学、政治学、社会学、倫理学、教育学、哲学、生物学、生態学、経営学、経済学等々、いや、すべての社会科学の根底に行動論があるとも言えよう。そして思想史としても、アメリカには長い行動論の下地があり、行動科学はアメリカを中心として発達してきた。これに反し、ヨーロッパでは既成の学問の壁を破るのをためらう傾向があり、行動科学よりは、人間科学の方に優位性をおこうとする。

さて、行動は、もっとも一般的に、どのように考えられるであろうか？。

動機→行動→目標（または目的）がその主要素となる。（心理学では動物実験から出発するので刺激S→反応R、またはS→Organismの思考判断→R）そして行動主体は、自然または社会、状況などにおいて行動を起すわけだから、いつも時間、空間的制約を受け、具体的にはある日時、行動の連続持続、その準備、または行動を成功させやすい状況またはchanceなどとの符号一致も考えられ、場所的にも静的な場所、動的な場所、そこにおける人間関係等が、複雑に組み合わさって考えられる。戦場と言うような特殊な場所の時もあるし、どこでもよいと云うような行為もある。行動は時に、肯定、否定の判断、決断、または態度の表示の時もあるし、発話と言うような物理的作用結果をとまなわれない場合もある。

行動する主体は、いつも時間空間のDateを決めてかかると同時に、その行動の手段、方法、道具、策略などを考えて行動し、人間関係としては仲間、味方、競走者、敵対者、傍観者などがある。傍観していながら、その行動を評価して伝える広い情報媒体者も想定できる。運命を決定するような重大な行動では、行動する前に長い準備期間において準備し、情報を集め、何度も計画し直し、決断する。行動を起す時期の決定が非常に難しい場合もある。

行動の主体は、目標達成、成功、効率を求めて、その行動を起し、持続し、努力し、工夫し、集中し、時には廻り道をしたり、時には目標を下げたり、変更したりする場合もある。いづれにしても、もっとも大きな効率を、できるだけ早く、たやすく、経済的にもやすく実施したいということに変わりはない。

行動者の上にあって、行動全体をregulateしているものが、価値である。例えば、真善美聖、正義、快樂、幸福……などが、それであるが、行動者の目標決定だけに関わるのではなく、動機づけやその他の要素にも関わってくる。この価値については、集団の行動をも考えると、人類一般としては同一の理念、同一の理想と言うことが言えても、それぞれの集団によって理

念理想、価値基準が同一とは言えない。ことに美的判断、音楽の好みなどになると、民族によって、非常に異なる。また同一民族でもその価値基準は歴史的時代的に変遷する。

さて、実際には、行動主体は個人の時もあるし、groupの時もあるし、集団で協議して一人が責任者の場合もあるし、国家の政策の実施のように、国民全体から外国への Impact を広く与える場合もある。

人間が欲求し、行動を起す時、最少限どう云う方向に向って行動を起こして行くのだろうか。私は前に触れた行動確率の論文では、V. E. Frankl の言う創造的価値、体験価値、態度価値なども入れて考えた。体験価値とは、苦悩のどん底のような状況にあっても、生きる希望を与え続けてくれるような過去の楽しい体験の価値である。態度価値とは直接行動には出られないような場合でも、イエス、ノーの態度は最少限示し出せるというようなケースである。(V. E. Frankl; Aertzliche Seelsorge 霜山訳「死と愛」実存分析入門 参照)

それを並べてみて、

- A. 本能（食欲、および性欲） X_1
- B. 不安および防御本能 X_2
- C. 怒りおよび攻撃本能 X_3
- D. 葛藤状態 X_4 （この場合は迷っていて行動が出てこない時である。）
- E. 社会的価値 X_5 （地位、名誉などを求める価値）
- F. 快樂——不快の価値 X_6
- G. 経済的価値 X_7
- H. 創造的価値 X_8
- I. 体験的価値 X_9
- J. 態度価値 X_{10}

として、一定の状況における行動結果を勘案して、その確率によって性格の決定づけを試みようとした。

しかし、必ずしも上にあげた十個の価値を定める必要はなく、価値体系を何に定めるかは、学者により学問分野によって非常に異なってくるし、ある実験目的のために他の価値を捨象した方が便利の時もあるし、美的な幾つかの微妙な価値を新らしく導入せねばならない場合も生じてくる場合もある。

いづれにしても、今、便宜上、かりに n 個の価値方向の座標上の行動を想定した場合、それを今度は確率としてではなく、ベクトルで現わしたとすると、そのベクトルは

$(X_1, X_2, X_3, \dots, X_n)$

の n 項の行列で表現できる。

ここまでは、研究者学者によって多少の価値選択の差はあっても、謂わば周知の理論であり、その学問によって、価値或いは目標、理想状態とするものが、異なってくるだけである。例えば、倫理学では価値は善悪、正義不正、快不快、幸福不幸などに重点をおいて行動の規範を論じ、経済学では需要と供給、顧傭と失業、消費傾向や労働価値、生産体制などに重点をおいて生産、交換、分配、消費の行動を考える。

3.

今、ある女性がいる、あるニューミュージックをきいたとたん、「あーあ、これこそ、私が長年心の底から求めていた調べだわ」と思ったとする。そんな時彼女は、自分の代りに、作曲者はその曲と詩を創ってくれたとさえ思う。そしてそれをきいた日は一日中幸福であり、その後の生き方までも一変したとする。

こんなケースの時、彼女の求めていたものは潜在意識上で模索されていたことになる。これは音楽の場合だけではなく、小説などの場合もある。そして、自分の代りを代弁してくれていると思う人が多ければ、その本は売れる。本の売れ行きだけでなく、英雄待望の政治効果も芸術一般のファン心理も、自分に代ってやってくれていると云う点では同じである。

ここで、私はすべての学問がとる手段、「思考の節約」に則って、行為効率と潜在意識だけに焦点をあてて、考えてみることにする。

さきに述べた個人の行動のベクトルの背後に、全体の潜在意識の総称のようなものを、抽象的に措置してみることにする。そうすると、そのベクトルも

$(Z_1, Z_2, Z_3 \dots \dots \dots Z_n)$

の行列で表現できる。けれども、これは大衆心理が求めていて、しかも、各自の本人には気づかれぬ大衆心理である。全体の欲求の向うところを代表するベクトルと言える。

この潜在意識下で求め続けている大衆社会の心理を表現したベクトルは、仮に統計的方法などで、かなり正確に掴むことができたとしても、元来、移ろいやすいのが、大衆心理であろうから、実は時々刻々に移ろい変って行こうとする。いつも、ゆれ動いて、自分さえその辿り行く方向がわからぬ場合もある。だから宣伝は効果的であり、政治的デマゴークには動かされやすい。また、だからまた、モードの流行なども、そう云う大衆心理に根ざしている。

今、個人と全体のベクトルの原点を同一にとった時、個人の起した行動のベクトル $(X_1, X_2 \dots \dots X_3)$ が、全体の潜在意識下のベクトル $(Z_1, Z_2 \dots \dots Z_n)$ に重なった方向に動いている時、個人の行動は成功するし、行為効率は高い。逆に外れた場合は、大衆の求めているものではないから、大衆の喝采はえられない。音楽の新曲の発表の時、本の売れ行き、映画の興業成績などでの成功はいつも、なんらかの意味での大衆の求めている潜在意識をくすぐったり、強烈な印象を与えたりした場合である。

けれども、個人行動のベクトルと全体の潜在意識のベクトルがぴったり一致した場合は、いつも成功かと言うと、そうも言えず、ひと頃の猫も尺子もプログラマー志望、デザイナー志望のように、明らかに社会はプログラマーやデザイナーを欲しがっていたとしても、それが多すぎる場合は需要と供給の法則に従うことは言うまでもない。かえって、誰も求めぬ方向に歩み出して、稀少性価値によって成功する場合も生じてくるわけである。

困ったことに、 $(Z_1, Z_2 \dots \dots Z_n)$ のベクトルは、どこまでも潜在意識下のベクトルであって、それが顕在化した場合、どの競走会社も、皆同じ方向の作品を出すのだから、忽まち、陳腐となり、供給過剰となって、行為効率はおち、売れ行きはとまってしまう。

もう一つ、困ることは、それが潜在意識下で求め続けられているベクトルだと云うことである。潜在から顕在へ、この転回が独創にもなり、大衆の求めている夢の実現ではあっても、それは大衆心理の底にかくれていると想定できるだけであって、ある会社だけが、ある個人だけが、いつでも神のように、その動いて行く方向を追うことはできない。理論上には考えられて

も、現実に利用することは難しい。

それに、音楽とか芸術の創作のような場合、美的価値は新しく創り直される。(Z₁、Z₂……Z_n)のうちのZ_mの要素をとりかえて、新しい美的価値を評価鑑賞の対象とする。ベートーベンが出てくるまでは、ベートーベンのような交響楽は騒音としか言えなかったかもしれない、ジャズ、ロックの出現の時も同様であろう。絵画の場合も19世紀から20世紀の初頭にかけては、次々と旧来の美的価値は破壊され、ダダイズムのように、むしろ醜のところにも美を見出した極端の例もある。

こう云う芸術の価値志向の場合、どこかに原始時代志向、古代志向、故郷志向、少年志向がかくされている。ピカソの画の一時期、ゴッヤンの画などが、それを示している。例えば日本人なら誰でも知っている「寅さん」映画の成功も、昔は東京の下町のどこにもあった下町独特の人情味が、団地やマンションの林立と核家族での乾いたバラバラの人間関係しか、周りに見出されなくなった結果の、一種の風変りの「故郷志向」も、その成功の一因と言えそうである。

とに角、芸術の場合は、いつでもではないが、今まで快適にきこえたり、見えていた価値基準は、忽ち崩れさる場合があり、潜在意識であるが故に、掴みえないと云うこと以外に、もう一つ、新しい芸術的価値が、誰にとっても予言しにくいと云う点もつけ加えて考えねばならぬ困難が待っている。

しかも、人々に快いと思われるメロディーは、国によって異なり、民族音楽に関する限り、美的価値は普遍的統一的にあてはめることはできず、各民族の伝統のメロディや、ガムラン音楽、イスラム圏などの宗教とか伝統と結びついた音楽を、同じ美的価値でふり分けることは、非常に難しい。だからまた、その民族において打ちたてられた伝統の美を打ちこわして、新しい価値の音楽美を論ずることは、その国以外の人にとっては、よけい難かしいに違いない。

私たちは個人の行動のベクトルと、大衆心理の潜在的意識志向のベクトルとの相関関係を把握することによって、個人行動の効率を考えてみた。この大衆心理の潜在的意識のベクトルは、個人行動の成功率を評価するバロメーターとなっている、謂わば、大衆心理の潜在的志向の「場」と言うことができ、行動の成否を占う状況 Situation とも言える。

4.

ところで、かくれている潜在意識内のカオス的なものを、明瞭な形で意識上に登らせ、それで大衆の喝采をえたり、大衆に役に立つものを提供しうるのは、言うまでもなく、人間だけに許された独創の思考と行動である。私たちは、今度は大衆の心理の潜在意識ではなく、独創を意図する個人の潜在意識と独創の間の秘密を探ってみることにする。

先に述べた大衆心理の潜在的意識の場の Situation に謂わば、呼応するように生じる行動の^{パフォーマンス}遂行は、科学技術の発明発見の場合は、もう少し時間的に長い Situation に応じて、導き出されてくる。例えば、ニュートン、ライプニッツ、関孝和が各個お互いに孤立して微積分法の考え方に到達したように。この不思議の符合の時間的一致は、人間の天才の思考の行きつく先が、その時代の専門知識では、当然の帰結として同じ方向へ行きつく証拠であるとも言えよう。

科学技術の発明発見を推進して行くものは、徹底した合理的推論と直感または洞察である。

推論は代数的思考、直感は幾何学的思考などとも言われる。但しわれわれがふつう練習問題をとく時のような推論が、科学的発見につながるはずはないのだから、直感にしても推論にしても、何らかの天才的飛躍を必要とする。ここにフォン、ノイマンの言うような「ひらめき」が貴ばれ、一方で偶然の不思議さがよく言われる。

偶然の例を一二あげてみると、ペニシリンの発見者フレミングが培養皿を顕微鏡で調べていて、偶然外気からの微生物によって汚染されていたのを知り、その汚染された培養皿をさらに細かく観察することによって、抗生物質を発見するようになった。その発見されたペニシリンが、人体に対して有毒かどうかを調べたフローリーはモルモットの代わりにネズミを使って実験した。もし、モルモットを使っていたら、ペニシリンはモルモットに有毒だったから、その段階で薬として使うのは長い間放棄されたかもしれないのである。その他、科学者の発見と偶然は、あげるときりが無い程多い。(R. ワトン著 渡辺・伊藤訳「発見はいかに行われたか」より引用する)

そう云う偶然ではなく、その人の辿った人生行路にとって、あとから考えると、その時代の状況が、その人の学問の樹立に非常に有利に作用している偶然もある。例えば、経済学者ケインズの学生時代のディフレーションとか、ドイツの敗戦とヨーロッパ全体の経済状態、若いアインシュタインにとってのガリレオ変換とローレンツ変換の論争、マイケルソン、モーレーの実験などである。

いづれにしても、偶然にしても、天才的ひらめきにしても、求めている学問的発見のための推論が行きづまり、必死で求め続けているその研究者自身の潜在意識内でのあがきが、ある時には偶然をきっかけとしてあかぬ兆しを捉えたり、ある時はふと、ひらめくものがあって、解決が見出されるのである。ポアンカレは、バスから降りる時、フッと数学上の発見を思いついたと言っている。

推論と推論の割れ目を、天才的直感によってつなごうとする「ひらめき」とは別に、学問の出発点に立ち帰ってみて、そこでの構想力のたて方、条件づけ、または方法論が、その人の理論を独特にする場合もある。アインシュタインでいえば、空間の相対性と光速度の一定から出発する、フレーゲで言えば記号論理に道を開く、カントールで言えば点集合と実無限から出発する。マリノフスキーと人類学への出発、フロイドと精神分析や無意識の研究、ビーグル号に乗りこんだダーウィンのいきごみ、それぞれその出発点が方法論をも決定づけている。これは、潜在意識と言うよりは、理論の出発点の条件づけ、構成づけの構想力に由来している。しかしその構想力の出発点が見出されるまでは、やはり、ねてもさめても、求め続けている困難点を考え続けた期間があったのではなかろうか。そうすると、日常の意識の上でも潜在意識でも求め続けていた時期があったと言えるかもしれない。

発見的思考方法としては、よく brain-storming が大切だと言われる。今までとらわれていた既存概念や通説と思われるものの思考手順や、そのもつ立場を、いかに徹底的にふり捨てるかに、発見の手順は見出されるかもしれない。例えば、シャガールの画を思い出してみるとよい。シャガールの画は技術的にいくら上手に、いくら努力しても、できあがる画ではない。うまい、下手を超越した画である。つまり今まで習った技法など、忘れさらないと、ああ云う画は生れてこない。学問の発見にも、これが言える。今までの知識をどう捨てさって、新しい路を見出すかが、課題である。

学問は時代の要請によって急速に発展する場合もある。世界大戦の最中のレーダーの発達などがよい例である。また論争によって、発展する場合もある。19世紀から20世紀にかけての、数学史の直感主義、形式主義、公理主義の論争、17世紀のパスカルとフェルマーの論争などは有名である。ニュートン、ライプニッツの時代には、学者同志が手紙のやりとりで知識を交換しあったり、疑問点をただしあったと云う。また、サイバネティクスを発見したウィナーの場合は、国も専門も異なる多数の人の会議によって、サイバネティクスの考え方を導き出したと言われる。現在の会社の中の研究室では、何十人、時には数百人におよぶ集団が、一つの目的に向って、実験研究することが、珍らしくないときく。

一方で、まったく孤立して、時代ともその時代の状況とも離れて、研究成果を残す場合もある。遺伝学のメンデル、群の発見に結びつくガロアなどが、そのよい例である。いずれも、はるか後世になってその価値が認められる。そしてその時代の要請とは無関係になしとげた仕事と言えよう。

さてすべての天才的発明発見の独創は、まず、基礎的知識の習得、小さな疑問がだんだん大きな疑問に変わって行く過程、時代そのものが当人に迫る宿命的課題、極度の集中没頭による迷路から脱出しようとする努力、いくつもの合理的推論の重ね合わせ、そして、その推論と推論のつながらない部分をみたくする模索、すべてこうしたプロセスで、日も月も、刻のたつのも忘れる毎日が過ぎて行く。推論はハッキリした意識の中で行なわなければ、間違ってしまう。しかし、目の前に立つ壁、解きたいアポリアは、理性的推論で解決しにくいから、アポリア（困難点）なのである。偶然は、そんな時、神の声のように、その人の進む方向を示す時もあるし、やってみても徒労の方向を示している場合もあるかもしれない。人は意識、無意識、潜在意識の中で、何回も推論と因果律と数式の列を、結びかえ、選び、壊し、たて直している。天才的直感とか、ひらめきは、その長い暗中模索のあとで、報われた時、始めて歓喜の呼びとなってくる。

ふろから裸でとび出して町を走ったと云うアルキメデスは、そんなよい実例と言える。

5.

ここで、今までの観点と少しはなれるかもしれないが、中国思想の中から、別の形の「無意識」をとり出してみることにする。

荘子の達生篇の中にある話である。

孔子が楚の国へゆくと、せむしの老人がいて、村の中で蟬せみとりをしていた。とりもちを竿の先につけて、ひつつけるのだが、まるで地面の上におちているものを拾うようにぞうさない。そこで孔子はたずねた。

「うまいものだな。何か秘訣でもあるのかね」

すると、そのせむしの老人は答えた。

「ありますよ。蟬の出さかる五、六月のころに、竿の先に土を丸めたものを二つ重ねて乗せ、これがおちないようにするまで練習すると、わずかしか蟬を逃さないようになります。三つ重ねても落ちないようにになると、10匹に一匹しか逃がさないようになります。さらに練習をつん

で、五つ重ねても落ちないようにすると、まるで地面に落ちているものを拾うように、簡単に蟬がとれるようになります。

ここまできますと、私自身がまるで立ち木が枯れ木のように無心そのものになり、天地の間のいっさいが目にはいらず、ただ蟬の羽だけが念頭にあるようになります。このような心境になれば、どんなことだって、できないことはなくなるのではありませんか」

これを聞いた孔子は、弟子たちに向かっていった。

「心を散らさずに働かしたならば、神わざにひとしいことができるというのが、まさしくこのせむしの老人のことをいったものだろう」

莊子「養生主篇」の中には、その他に、料理の名人のことが書いてあり、長い間の修練の結果、ただ無心に刀をふるっておって、それでいて自然にうまく牛の料理ができあがる話がでてくる。(森三樹三郎「無の思想」)

これを故森三樹三郎氏は、「練達自然」と名づけているが、こう云う話は、他にもよくある。棟方志功氏が版木を彫っているが、自分の彫っていると云うことも、一心不乱の結果か、忘れてしまって、版木の上に、画が自然と湧き出してくると云う表現をつかっているのが、そのよい例である。

もう一つ、こんどは全然別の形の例である。これも莊子の「達生篇」に出ているのだが、酔ったものが、車から墮ちても、車がかなり速く走っていても、死なないと語っている。これは「物に応じて無方なる」無心でいるからである。その酔った人は、車に乗ったのも知らず、車から墮ちても、まだ知らない。だから、車からおちても、大きな怪我もないのだと言うのである。(福永光司著「莊子」より引用する)

私もどこでだったか忘れてしまったが、それと似た話を田舎で聞いたことを覚えている。酔っていて、かなり高い所から転がりおちて、怪我もなかった人自身の経験談を聞いたことがある。この場合も、危ないとか、恐ろしいとか、思わないで、身体のごこにも力を入れてないのが、よいのだと思う。この理を応用して、新武道をつくった人がいるとも聞いたことがある。これも全然別の形の「無意識」ではないかと思われる。

こんな実例にも見られるように、また、私たちがベクトルと行列で示した大衆心理の潜在意識の例から見ても、無意識とか、潜在意識と言うと、すぐに、フロイトのidとか、性倒錯などに結びつけるのは、かえって、平凡な毎日を送っている人の心理から外れた解釈をすることになってしまうのではなからうか。集団無意識についても、研究者はすぐにユングの「原型論」や構造主義のレヴィーストラウスの「神話論」に結びつけて考える。これもヨーロッパ人独特の神学的解釈の傾向の現われの一つではなからうか。かれら先達者の「無意識」の解釈は、あれも「無意識」の一つの解釈の仕方であったとして、それが総てを覆っているとはまでは考える必要はないのではなからうか。

ついでにもう一つ、現代の日本でよく言われるスキゾ人間（分裂症型人間）、パラノイア的（偏執狂的）人間の人間型についても、一言私見を加えておく。平凡に生きる平凡な人を、異常心理の枠組みをおしあてて見ようとすしぎているのが、こうした傾向ではなからうか？むしろ、現代の日本では、精神病として隔離してしまおうとする古い社会的体質をこそ、何よりもまず改められねばならぬ先決問題であるはずなのだ。

私たちの潜在意識と無意識と行動の間の研究成果は、いくつもの波及的課題を残したままであるが、その伏在している問題は次の発表を待つことにして、ここで閉じることにする。終りに本研究を特別研究費をもって助成いただいた大阪産業大学産業研究所に深い感謝の意を表して、今後の課題に期することにする。(行動の matrix 表現と大衆社会の潜在意識との関係については、論理学の講義の「科学方法論」の中で多くの文献を参照して、また倫理学の行動の基礎理論として10年以上前から毎年のように大阪大学その他で講義をしていたが、紙上に発表するのは、これが初めてである。)

参考文献

- (1) 南 博 行動理論史 1976年
- (2) 南 博 人間行動学 1980年
- (3) タルコット・パーソンズ (稲上・厚東訳) 社会的行為の構造、I 総論、1976年
- (4) Rudolf Groner, Marina Groner, Walter F Bischof; Methods of Heuristics, 1983.
- (5) Geoffray Hall; Behaviour, an Introduction to Psychology as a Behavioral Science, 1983.
- (6) Joseph Nuttin; Motivation, Planning and Action. 1980.
- (7) Husen & Postlethwaite; The International Encyclopedia of Education, 1985.
- (8) I. M. Lewis; Social Anthropology in Perspective, The Relevance of Social Anthropology, 1976.
- (9) C. G. ユング (林道義訳) 元型論 無意識の構造 1982
- (10) Anthony Storr; The Essential Jung 1983.
- (11) ロマン・インガルテン (武井・赤松訳) 人間論、1983年
- (12) H. ラング (石田浩之訳) 言語と無意識、ジャック・ラカンの精神分析
- (13) 金谷治訳註 莊子